

「卒婚」自由な人生楽しむ

「のこぎりは引く時に力を入れるとうまくいくで」。和歌山県紀美野町の山あいにある竹林で、住民グループが子ども向けに開いた伐採体験。講師役として参加した梶本敏秀さん(67)が、のこぎりの扱いに苦戦する小学生にコツを教えていた。

梶本さんがこの町に住み始めたのは2011年11月。前年の春に大阪府泉南市役所を定年退職し、「田舎暮らしがしたい」という夢を実現するためだった。「大阪を離れたくない」という妻(67)を同市の自宅に残してきた。

午前7時には山に入り、正午過ぎまで林業会社の作業を手伝う。高齢化が進む町の活性化にも携わりたいと、4年前に地域のひとと民泊を推進する市民団体を設立。ボーイスカウトの指導者として長年活動した技能を生かし、川下りや伐採した竹を使ったそうめん流しを楽しんでもらうもてなしで、外国人観光客も訪れるまでになった。

「大阪の自宅にいたら、庭いじりをしていただけだっただろう。」

新しいことに挑戦し、これまで出会えなかった人とも知り合えた。真っ黒に日焼けした顔が、充実した生活を物語る。

25歳の時に結婚し、専業主婦の妻との間に2人の子をもうけた。「ベタバタしているわけでも、距離を置いているわけでもない、ごく普通の夫婦関係」だと思つた。

子どもはすでに独立し、夫婦2人暮らし。定年後、妻にはすでに確立された1日の過ごし方があり、平日の自宅に居つらさを感じた。そんな時、小学校の同窓会に行き、体の不調を訴える旧友の姿に「元気でいられるのも、あと10年かもしれない」と感じた。「体が動くうちは、やりたいことをしよう」と移住を決め、インターネットで地方の空き家探しを始めた。ただ、都会生活を好む妻のことを考えると、「自分勝手な行動では」と後ろめたさを感じ、なかなか

相談できなかった。ようやく切り出したのは、11年夏に家を見つけてから。妻は「私ひとりだと心細くなるけれど、田舎暮らしをしたがっていたのは前から知っていたから」と背中を押してくれた。友人らには「嫁さんをほったらかしにして」と心配されたが、「みんなが思ってるほど、嫁さんは一緒にいたいと思うてへんよ」と受け流した。しばらくして、タレント清水アキラさんの「卒婚宣言」が話題になった。「『卒婚』という言葉には人生を楽しむという前向きな響きがある。自分の選択が正当化された気がしてうれしかった」

一方、妻の方は友人とランチや日帰り旅行を楽しんだり、娘と2人で海外に出かけたり。「一緒にいなくても困らないし、一人暮らしを満喫させてもらっている」と笑う。

月に数回、大阪の自宅に戻ると、妻は食卓に5、7品は並べてくれ、帰り際に野菜の煮物や魚の煮付けなどを持たせてくれる。冷凍食品中心の食生活を送る梶本さんの体を気遣ってのこと。「離れて妻のありがたさに気づけた」

最近、知人が開いたピザ店で週末、参加者が割ったまきでピザを焼き、里山の魅力を感じてもらおう体験イベントを始めた。「今後のことを考えると心配はあるけれど、今を生きることを考え、体の続く限り、受け入れてくれた町の活性化に尽くしたい」と誓う。



関係見直す機会 大切

7月の当欄でみなさんの卒婚体験を募ったところ、亡くなったご両親が晩年の約10年間、卒婚生活を送ったという女性(62)からすてきなエピソードが満載の手紙をいただきました。

卒婚は母親側の提案で、当初は「やりきれない」と言っていた父親は「週1回は母宅に通い、足腰が弱ってきた母のために掃除したり電球を替えたりしていた」。安否確認を込めて日替わりで電話をかけ合い、母親は「受話器の前で電話を待っていた。その昔、あんなにしゃべりたくないわ、と言っていたのに……」。父親の死後、残された日記帳をめくると、「今日は会えて楽しかった」と記されていたそうです。

近くにいる人にはつい依存したくなるもの。だからこそ、卒婚に限らず、関係を見直す機会を意識して設ける大切さを感じます。(中館聡子)

婚姻関係は維持しながら、別々の生活を楽しむ「卒婚」を選ぶ熟年夫婦がいる。定年退職や子どもの独立などをきっかけに人生を見つめ直し、老後を自由に生きたい、新たな夢を追いかけたいといった思いがあるようだ。
(浦西啓介)

「卒婚」は、夫婦の新しいライフスタイルを表す言葉として、卒業と結婚を組み合わせて生まれた造語だ。フリーライター杉山由美子さん(65)が2004年、お互いが自分らしく生きるために実践した6組の夫婦を紹介した本

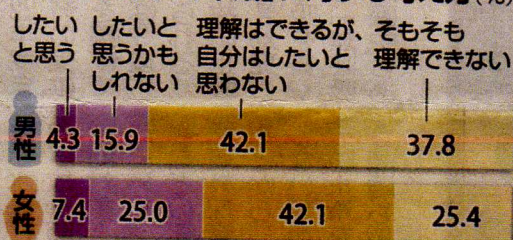
* 40〜50代意識調査

「卒婚のススメ」を刊行して、広まった。

「ダイヤ高齢社会研究財団」(東京)が今年、40〜50代の正社員を対象に行った意識調査では、卒婚を、「したいと思う」「したいと思うかも」「完全否定」した。

男性2割、女性3割が肯定的

◆40〜50代の「卒婚」に対する考え方(%)



※2017年、ダイヤ高齢社会研究財団調べ

人は男性で2割、女性では3割に上った。一方で、男性の4割近く、女性の4人に1人が「そもそも理解できない」と「完全否定」した。

杉山さんは、自身も卒婚の実践者だ。翻訳家の夫と共働きで2人の娘を育てるうち、家事の分担などで言い争うようになったという。そして50歳の頃、200円ほど離れて別々に居を構えた。「多くの夫婦がより良い形を探し、試行錯誤する中で卒婚が生まれた。私も卒婚に救いを感じた」と話す。

「世間体を考えて離婚は避けたいからと、卒婚を考える人は多い。けれど、離婚回避を第1の目的とするのではなく、互いを尊重し合い、自然体で生きていく手段として考えてほしい」と呼びかける。